

太平記 卷第三十二

附 六孫王経元

きんときおさなだち

『太平記』は1370年頃までに大成。

直冬上洛事付鬼丸鬼切事

源頼光より秘蔵の太刀を賜った渡邊の綱の鬼退治、及び切られた腕を鬼が取り返しに現れて討たれる事件の後に、太刀の説明として以下の記述。

其後此の太刀多田満仲が手に渡り、信濃国戸蔵山にて又鬼を切たる事あり。依之其名を鬼切と云なり。此太刀は、伯耆国会見郡に大原五郎太夫安綱と云鍛冶、一心清浄の誠を至し、きたひ出したる剣也。時の武将田村の將軍に是を奉る。此は鈴鹿の御前、田村將軍と、鈴鹿山にて劍合の劍是也。其後田村丸、伊勢大神宮へ参詣の時、大宮より夢の告を以て、御所望有て御殿に被納。其後撰津守頼光、太神宮参詣の時夢想あり。「汝に此劍を与る。是を以て子孫代々の家嫡に伝へ、天

下の守たるべし。」と示給ひたる太刀也。されば源家に執せらるゝも理なり。

註 J-TEXTS 日本文学電子図書館の国民文庫本より。

附 多田満中による戸隠山の鬼退治のモチーフは後世も引き継がれる。たとえば次のようなものである。

「六孫王経元」（別名「源氏のゆらひ」）。一六五九年。

「金平浄瑠璃正本集」所収。

六孫王経元が天皇を悩ます平将門の怨霊である魔王を退治して源氏の姓を得る。祝いに来た武士の一人の信濃の国の住人望月佐近有茂が、戸隠山の鬼神を退治せよとの無礼な物言い。父に代わって挨拶を受けた子の満中は、望月をやりこめはしたが、人々が困るのは事実と家来の金末を共に戸隠山に出かける。途中、諏訪大明神の霊夢を得、戸隠山の大きな岩穴から現れた一丈ばかりの鬼神を退治。

以後、悪役の望月が金末を苦しめ、金末の子の千代

若、後の坂田金時が仇を討つという筋書き。

「きんときおさなだち」赤本。宝暦頃。「近世子どのの  
絵本集」所収。

金末の子の金時の怪童ぶりが中心だが、成人した金  
時が、満中の子の頼光に見守られて、戸隠山で鬼神  
退治を退治する場面で終わる。